中牧弘允・日置弘一郎編『会社のなかの宗教――経営人類学の視点――』

東方出版　二〇〇九年九月五日刊
A5判　二六八頁　三八〇〇円＋税

川上恒雄

宗教人類学の中牧弘允氏らを中心に進めてきた国立民族学博物館での「経営人類学」共同研究シリーズの最新作である。これまで、『経営人類学ことはじめ――会社とサラリーマン』（一九九七年）、『社葬の経営人類学』（一九九九年）、『企業博物館の経営人類学』（二〇〇二年）、『日本の組織――社縁文化とインフォーマル活動』（二〇〇三年）、『会社文化のグローバル化――経営人類学的考察』（二〇〇七年）――などを出版しており、『社葬の経営人類学』については、本誌でも芹川博通氏による書評がある。

「経営人類学」とは、中牧氏によると、「集団や組織の経営的側面を人類学的展望と人類学的手法によって解明しようとするものである」（『経営人類学ことはじめ』二八頁）。ただし、本書と上記既刊書の執筆に加わった研究者の専門は、人類学のみならず、経営学や社会学、宗教学、民俗学、経済史など、多彩である。

本書の構成

本書の構成は以下のように、「日本の会社と宗教」「欧米の会社と宗教」「会社と宗教の経営」――の三部から成っている。

序論――会社文化と宗教文化をめぐって　中牧弘允・日置弘一郎

第一部　日本の会社と宗教

第1章　「お道」と企業経営――天理教信仰と事業が融合する論理のありかと実例　住原則也

第2章　企業の経営倫理構築にみる宗教的エートス――昭和三〇年代の八幡製鉄所における社会科教育を例として　金子　毅

第3章　企業家と太子信仰　神崎宣武

第二部　欧米の会社と宗教

第4章　空間のブランディング　松永ルエラ

第5章　「社食」機能のフランス型拡充プロセス――〝経営家族主義〟から〝新・社会的同志愛〟へ　市川文彦

第6章　スピリチュアリティを取り込む北米企業――企業文化の創造　村山元理

第三部　会社と宗教の経営

第7章　企業社会の秩序形成と「クウェーカーコード」――テイラーの二〇世紀からキャドバリーの二一世紀へ　三井　泉

第8章　祈りと感謝をめぐる宗教システム――宗教経営学の視点から　岩井　洋

第9章　企業経営行動と宗教――行動への「圧力」を媒介として　岩田奇志

編者によると、「本書は会社のなかに見られる宗教活動や経営者の宗教的信念、あるいは従業員の宗教的文化背景などに焦点を当て、人類学的な記述と分析をこころみたものである」（二六八頁）。ただし、すべての収録論文が必ずしも、「宗教活動」「宗教的信念」「宗教的文化背景」のいずれかを中心テーマとしているわけではない。また、「会社」「経営者」「従業員」を対象としていない論文もある。以下、各章の内容を短く紹介する。

各章の概要

「序論」（中牧弘允・日置弘一郎）は、会社と宗教との浅からぬ関係について述べたうえで、「経営人類学」の「先祖」がアメリカ経営学のF・W・テイラーとイギリス人類学のE・B・タイラーの二人であることを論じている。両者が実業家を数多く生んだクウェーカーであることに注目している。

第1章「『お道』と企業経営――天理教信仰と事業が融合する論理のありかと実例」（住原則也）は、天理教の教え自体が営利事業をとくに奨励していないものの、陽気ぐらし社会の実現という目的に向けて「道」を歩む「里の仙人」になる手段として、「はたらき」という利他心を媒介することで、営利事業が正当化される論理を明らかにしている。そして、実例として、羊羹の「米屋」創業者の諸岡長蔵と「スジャータ」で知られる「めいらくグループ」の日比孝吉を取り上げ、その目的と手段とを単純な二分法として理解すべきでないことも示唆している。

第2章「企業の経営倫理構築にみる宗教的エートス――昭和三〇年代の八幡製鉄所における社会科教育を例として」（金子毅）は、アメリカ渡来の「人間関係論」と「安全第一」が貫文化の日本企業でいかに認識されたのかを、灘吉国五郎（八幡製鉄所教育部講師）の遺した膨大な資料をもとに、「社会科教育」という人格形成の企業内教育に焦点を当てて考察している。「個人・人格」を重んじる西欧の宗教伝統が背景にある「人間関係論」「安全第一」も、「ピア・プレッシャー」の典型である日本企業では「和」「愛社心」に読み替えられ、昭和三〇年代の合理化政策を後押ししたと解釈している。

第3章「企業家と太子信仰」（神崎宣武）は、日本企業の社是・社訓で「和」と「公」が柱であることに注目し、聖徳太子に対する信仰が日本人の根底にあるのではないかとみている。その論拠として、①浄土真宗における聖徳太子の開祖的地位、②職能集団である太子講の存在、③戦前の近代学校教育における指針としての「和を以て貴しと為し」――をあげている。

第4章「空間のブランディング」（松永ルエラ）は、従来の空間ブランディング研究が消費に焦点を当てがちなのに対し、国際ブランディング会社の参与観察を通して空間の生産プロセスにも目を向けている。事例として、日本のある携帯電話会社の都内中核店舗のデザイン計画（クライアントが日本企業の場合、プレゼンテーションが社長などの権限者ではなくその仲介

者に対して行うことから生じる問題）と、イギリスのスーパーマーケット「テスコ」のパン売り場（本書では「ベーカリー」と表記）の再ブランディング（教会の祭壇と信者席の配置をイメージ）を取り上げている。これら事例にみる空間生産の複雑なプロセスを考慮に入れれば、ブランド空間に関する解釈のあり方に再検討を要することを、示唆している。

第5章「『社食』機能のフランス型拡充プロセス――〝経営家族主義〟から〝新・社会的同志愛〟へ」（市川文彦）は、フランスのオフィスワーカーの昼食事情（一時帰宅者に次いで「社員食堂」利用者が多い）を概観したうえで、世界初の百貨店ボン・マルシェが「社食」を導入した経緯を考察している。創業者ブシコ夫妻のキリスト教的博愛主義が背景の一にあったと指摘している。現代フランスにおいては、「社食」が社内の組織活性化に寄与しているのみならず、その食券所有者が慈善団体などに券を寄付して現金化することで、国内外の恵まれない人々を支援する社会化機能も果たしていることにも触れている。

第6章「スピリチュアリティを取り込む北米企業――企業文化の創造」（村山元理）は、アメリカの著名な経営学教科書でも一節が設けられるようになった「職場のスピリチュアリティ」に焦点を当てている。全米で「職場のスピリチュアリティ」運動が広がった背景として、一九九〇年代の雇用環境の不安定化や、職場の指導的立場となったベビー・ブーマー世代の仕事の意味の追求、物質文明から精神文明への移行――を指摘している。事例として、カナダの複数の企業とアメリカのサウスウエスト航空を取り上げている。最後に、企業倫理とスピリチュアリティの関係について触れている。

第7章「企業社会の秩序形成と『クウェーカーコード』――テイラーの二〇世紀からキャドバリーの二一世紀へ」（三井泉）は、一八世紀から一九世紀にかけてのイギリスにおいてクウェーカーが少数であるにもかかわらず著名な実業家を次々と生み出した背景の一つに、行動規範としての「クウェーカーコード」があったことを指摘している。この「コード」によってクウェーカーは外部社会での信頼性を高めた。その精神は、二〇世紀において「科学的管理法」で知られるアメリカのF・W・テイラーが継承し、二一世紀は、イギリスのサッチャー政権下でコーポレート・ガバナンスに関する「キャドバリー・リポート」をまとめたA・キャドバリー（チョコレートで有名な「キャドバリー」元会長、キャドバリー家の末裔）の理念が切り開くのではないかと述べている。

第8章「祈りと感謝をめぐる宗教システム――宗教経営学の視点から」（岩井洋）は、西欧カトリック社会の奉納画エクス・ヴォートと日本の絵馬を取り上げ、岩井氏の提唱する「宗教経営学」の観点から、宗教システムの変動について比較検討している。両者には図像表現や奉納形態において相違があるものの、「エクス・ヴォート・絵馬の奉納→ギャラリーとしての教会・絵馬堂→奇跡集・願懸重宝記の出版→巡礼地・参詣地の形成」という類似したシステムの動態から、聖母信仰・流行神信仰が形成されると論じている。

第9章「企業経営行動と宗教――行動への『圧力』を媒介として」（岩田奇志）は、マレーシアの主なエスニック集団であるマレー人、中国人移民、インド人移民それぞれの経済活動とその歴史的背景について比較したうえで、「環境圧力」「理念圧力」という概念を用いて経済行動努力の相違に関する説明を試みている。宗教はこれら「圧力」を高めることも低めることもあるとし、ウェーバーのような宗教還元論的な経済発展説について再考を要する可能性があると解釈している。

論評

以上、各論文はいずれも、宗教学者であればあまりお目にかかることのない、興味深いテーマを扱っている。一口に「経営人類学」といっても研究対象へのアプローチの仕方は多様で、これが学際研究のおもしろいところである（執筆者のうち人類学プロパーの研究者は少数派である）。各論文の質も、「あとがき」によれば国立民族学博物館の査読を受けているとのことで、一定の水準をクリアしていると思われる。その半面、各論文のテーマが個性的であるため、本書を貫くメッセージを読み取るのが難しい。評者自身は「会社」の従業員なので、自分の実生活にも関係する本なのかと非常に期待して本書を手に取ったのだが、『会社のなかの宗教』というタイトルから思い描いていた内容とはいささか異なるものであった。

まず、目次をみると、各章のタイトルに会社名がみられるのが第2章の金子論文のみである。タイトルに会社名を入れる必然性は無論ないのだが、『会社のなかの宗教』と題した書籍に会社名をタイトルに入れた論文が一つしかないというのも、奇妙ではある。一方、具体的な宗教団体名や宗派名をタイトルに織り込んだ論文も、二本しかない（「天理教」と「クウェーカー」）。これらのことから、本書全体の具体的イメージが、目次をみただけではあまり湧いてこない。この点は、既刊の「社葬の経営人類学」や『企業博物館の経営人類学』のように、「社葬」や「企業博物館」という対象の明確な研究書とは対照的である。

目次で本書の性格がわからなければ、イントロダクションに相当する「序論」に目を通すのが通例である。しかし、九頁分の「序論」の半分超が、ともにクウェーカーである人類学者のタイラーと科学的管理法のテイラーとが「経営人類学」の「祖先」であると論じることに割かれており、本書の構成についての解説は二頁強しかない。つまり、『会社のなかの宗教』というテーマを考察する際、先行研究にはどのようなものがあるのか、それに対して本書の各論文はいかなる位置づけにあるのかという、全体の見取り図がよくわからないのである。

二頁強の解説の中身にも問題が散見される。たとえば、第一部の「日本の会社と宗教」についての案内で、編者は最初、安岡正篤の師友会を取り上げている。ところが、第一部の三本の論文はいずれも、安岡にも師友会にも言及していない。おそらく、企業家と宗教思想との関係について象徴的な例を出したのかと思われるが、唐突で、読者を混乱させる可能性はある。

また、この第一部の第2章の金子論文について、「アメリカの経営思想を日本の企業風土に定着させようとした例を八幡製鉄所に見いだしている」（一五頁）と紹介しているが、これだ

けではなぜ、『会社のなかの宗教』という題名の本に収録されているのか、わからない。

逆に、第二部「欧米の会社と宗教」に収録された第4章の松永論文について、「イギリス国教会の教会建築がスーパーの空間配置のモデルとなっていることを論じた」（一六頁）としており、なるほど本書の題名にふさわしい論文かと思わせるが、実際に読んでみると、それは事例の一部にすぎず（また、正しくは、「教会内部の空間配置がスーパーのパン売り場のモデルである」とすべき――ちなみに中牧氏の著作である『会社のカミ・ホトケ』第六章には正確な記述がある）、主題はタイトルどおり「空間のブランディング」である。

「あとがき」によると、ほかの共同研究成果の出版も前後に続いているなど編者は多忙を極めているうえ、予定していた出版社が民事再生法の適用を申請するというハプニングにも直面したとのことで、本書の「序論」で他の研究者の執筆した論文を一つひとつ解説する余裕が編者にあまりなかったのではないかと推察される。しかし、それぞれが著者もテーマも異なる論文を収録した本書のような学術書では、「序論」で充実したガイドがあったほうが、読者の便になることは事実である。

ところで、さらに「ないものねだり」ではあるのだが、イギリスの事例研究が二本あるのに、海外で非欧米圏の事例研究がマレーシアのみというのは寂しい。経済発展著しい周辺の韓国や中国、台湾の事例が皆無なのは、評者にも意外だった。共同研究の構成メンバーの専門から結果的にそうなったのだと思われるが、同じ東アジアの国・地域の事例は日本人にとって非常に知りたいところである（ちなみに、一連の「経営人類学」シリーズの既刊書では取り上げている）。また、宗教別にみると、日本人にも身近な仏教や金融で話題のイスラームなどの事例もあれば、なお包括的になるかと思われる。

一方、二本あるイギリス関連の論文のテーマ（松永論文のスーパー「テスコ」の事例と三井論文のクウェーカー）が、現代イギリスの『会社のなかの宗教』の典型であるかどうかは不明である。もちろん典型例を考察する必要性は必ずしもないのだが、たとえば第7章の三井論文を読むと、イギリスの実業界ではクウェーカーの理念が依然、強力であるかのような印象を受ける。しかし、評者がかつてイギリスに滞在していたころ、「ビジネスと宗教」について耳にしたのは、多くが「ニュー・エイジ」や「自己啓発」関連のもので、クウェーカーのことは――評者の情報源が偏っている可能性は否めないが――ほとんど聞いたことがない。そうすると、クウェーカーが今なおイギリス実業界で目立った存在であるのか、判然としないのである。

このように海外の事例については、日本人の読者は、たとえ研究者であっても、すべての国・地域の事情について通じているとは思えないので、自身の論文テーマを相対化するような背景的情報を付加することが必要だろう（マレーシアの事例を取り上げた第9章の岩田論文は非常にわかりやすい）。

この点は、北米の「職場のスピリチュアリティ」を考察している第6章の村山論文にも該当すると思われる。村山氏も指摘しているように、「職場のスピリチュアリティ」はアメリカの

著名な経営学の教科書にも取り上げられている。一方で、評者は宗教社会学などの教科書を読むと、アメリカにおけるビジネス関連の話題は、「職場のスピリチュアリティ」よりも、ペンテコステ派の記述に突き当たることが時おりある。そうすると、北米全体として、ビジネスの世界における宗教については、どのような諸潮流があるのか知りたくなる。

さらに付け加えれば、海外の事例でなくても同様に、天理教を考察している第1章の住原論文であれば他の新宗教の事例（既存研究はほとんどないのかもしれないが）、八幡製鉄所を考察している第2章の金子論文であれば「人間関係論」の他企業の導入例（評者は経営学に明るくないが、アメリカの「人間関係論」が昭和三〇年代前後に流行していたとは耳にしたことがある）など、いくつかイントロダクションで紹介があれば、読者の理解も深まるのではないか。

「経営人類学」は新しい研究分野なので、読者の学問的背景はさまざまである可能性が高い。「あとがき」によると、この「経営人類学」シリーズの出版も続くとのこと。これからは、異分野の読者にもわかりやすいような俯瞰的・相対的な視点がより多く導入されることを期待している。

最後に、本書において、「宗教」（あるいは「スピリチュアリティ」）を企業経営や会社文化にとってポジティブな機能を果たしているとみなす論考が多いのが気になったということを指摘したい。例外的に第2章の金子論文では、アメリカ由来の「人間関係論」が「ピア・プレッシャー」のある日本企業の職場ではかえって従業員の人格の自律性を阻害することを指摘しているが、それは日本に「人間関係論」の前提としている自律した人格を重んじる宗教伝統がないからだと指摘しているのであって、宗教自体をネガティブにとらえているわけではない。第6章の村山論文はスピリチュアリティの負の側面について認識しているものの、短い指摘にとどまっている。

評者が先に、本書について「『会社のなかの宗教』というタイトルから思い描いていた内容とはいささか異なるものであった」と述べた最大の理由は、会社内部で生成される宗教的なもの（中牧氏の用語を使えば「会社宗教」と呼ぶべきか）を、功罪含めていくつかの側面から批判的に検討した論考があるのではないかと期待したからである。会社内において、宗教はたしかに道徳的理念と結び付く面もあるのだが、一方で「破壊」や「抑圧」の一因となることもある。また、宗教といっても、会社の内部では、キリスト教や仏教などの既成宗教の伝統と深く関連している必然性はない。極端な例をあげれば、アメリカの「マネジメント・グル」の「教え」や「実践」に由来するなどということも考えられる。つまり、会社ならではの宗教の諸性質について、個人的には興味がある。

しかし、学問的考察に先立って、会社の内部のことについてあれやこれや情報を得るのがきわめて困難であることは、評者も認識している。精力的なフィールドワークにもとづいている第4章の松永論文を読むと、私的なコネクション（配偶者の勤務先）がなければブランディング会社についてなかなかこれだけの情報は入手できないとも思ってしまう。会社にとっては研究者に情報を開示する義務も利点もとくにない。まして宗教

の研究などといわれてしまえば、容易に調査を許可するはずもない。

それでも、「経営人類学」と、「人類学」をうたっているのならば、会社の内部に深く踏み込んだ調査研究の成果がいつかは出てくることを期待したい。「共同研究」でさまざまな対象の研究成果を生産することも重要かもしれないが、複数の研究者が文字どおり共同で特定の会社を対象にした研究はないものかとよく思う。それは非現実的で無理なお願いだろうか。

「経営人類学」シリーズの次の成果は、「会社神話」の研究だそうである。評者には未知のテーマだけに、非常に楽しみである。なお、紙幅の都合上、この書評では「序論」を除く九本の論文すべてについての詳細な論評に立ち入ることができなかった。この点については、ご寛恕を乞うばかりである。

カール・ベッカー、弓山達也編『いのち　教育　スピリチュアリティ』

大正大学出版会　二〇〇九年九月一〇日刊
A5判　xvi＋二一四頁　二七〇〇円＋税

伊藤雅之

一　本書の目的

近年、宗教学の分野では、宗教を補完したり、代替したり、あるいはその核心にあるものとしてのスピリチュアリティへの関心が高まってきている。また看護・医療の分野でも、人びとの生や死に密接に関わるスピリチュアルな側面は注目されてきている。さらに、小学校から大学までの教育の場においても、いのちの大切さや生きる意味を考える重要性が認識され、スピリチュアル教育として括られるようになった。本書はこうした複数領域におけるスピリチュアリティへの関心の高まりをふまえ、「いのち」「教育」「スピリチュアリティ」を三つのキーワードとして、宗教学、教育学、医療・福祉、心理学、哲学を専門とする執筆陣による論文、シンポジウムでの発題・討論から構成された新しい教育論である。編者は現代の多様な宗教へのフィールドワークを精力的にし、幅広い研究や実践的活動をしているカール・ベッカー、弓山達也の二人となっている。

二　各章の内容紹介

三部構成となる本書の第Ⅰ部は、「生と死の教育」というタイトルのもと、谷口憲俊による「『失うこと』は、学びと成長につながる」と題された論文が配置されている。この末尾には「追補　資料　イギリス国定カリキュラム」が付され、全体で六五頁の分量となっている。谷口は医療従事者の立場から、人生とは常に「失うこと」と「得ること」の繰り返しであるが、そのことに気づかないことによって多くの問題が生じるとしている。本論文では特に、日頃見過ごしがちな「失うこと」への気づきの促進を目的として、「生と死」からの題材を取り上げ、子どもたちの生育程度に合わせて適切な学びができるように、現場で使える実践方法や具体的なコミュニケーション術について詳述している。谷口によれば、「生と死」について子どもたちが考える機会を提供することは、子どもたちが「この世界を大切にすること」「自分を大切にすること」などを学び、生きる力を子どもたちに与えるという意味でスピリチュアル教育であるという。

第Ⅱ部は「学校教育とスピリチュアル教育」というタイトルのもと七本の論文が収録されている。

得丸定子による「学校で行う『スピリチュアル教育』の手がかり」では、日本の大学生を対象に「死と死後」の不安に関する調査」を実施し、学校で「スピリチュアル教育」を展開する際に配慮すべき要因を探ろうとする。調査データを分析した結果、子どもたちが「死と死後」のことについて不安に感じていることを因子として抽出すると、①死後の世界と肉体についての不安、②死ぬ過程についての不安、③身近な人の死についての不安、④人生を未完に終えることについての不安、⑤死体についての不安であったという。得丸によれば、現代の子どもたちには「宗教観の育成という誤解や反発を招きそうな言葉を用いずに、特定の宗教の枠内に入らないスピリチュアル教育という名称が求められているのであろう」（九一頁）としている。そのうえで、本調査の結果をふまえつつ、授業で扱う場合、「死後の世界はあるのだろうか、ないのだろうか、あるとしたらどのような世界なのだろうか」、「死んだ後、自分の肉体はどうなるのだろうか」といったテーマの授業に多くの子どもたちは関心を示すのではないかと論じている。

次に、カール・ベッカーによる「SOCの現状とスピリチュアル教育の意味」では、アメリカ系イスラエル移民の医療社会学者であるアロン・アントノフスキーの研究業績を紹介しつつ、生き甲斐の重要性が論じられている。アントノフスキーの特筆すべき点は、環境と食生活よりも、人生観の方が寿命や病歴に大きな影響を与えていることを科学的に証明したことにある。彼が用いたキーワードは Sense of Coherence（以下SOC）であり、ベッカーはこれを「自分の日常や人生には意味があると思える感覚」であり、要するに「意味感」であるとしている（一〇三頁）。ベッカーは、ストレスや歳病や慢性疾患などに対するSOCの影響や効果などに関する研究成果をまとめている。こうした知見をふまえ、「次の段階は、如何にして人間のSOCを高め得るかを検討し、人々や社会がより健やかに成ることができるかを探るべきであろう」（一一二頁）とSO

三ツ松　誠　日本学術振興会特別研究員
明　憲一　東京大学大学院
森　新之介　東北大学大学院
森田　未咲　東北大学大学院
渡辺　隆明　大正大学大学院

会員訃報

日本宗教学会評議員、東北大学名誉教授、塚本啓祥先生は二〇一〇年一月二〇日逝去されました。享年八〇歳。

日本宗教学会理事、大正大学教授、鷲見定信先生は二〇一〇年二月一九日逝去されました。享年六五歳。

日本宗教学会評議員、聖心女子大学名誉教授、松本滋先生は二〇一〇年三月一九日逝去されました。享年七七歳。

ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

執筆者紹介（執筆順）

山本　伸一　東京大学大学院
富積　厚文　株式会社法藏館
杉本　隆司　羽衣国際大学非常勤講師
碧海　寿広　宗教情報リサーチセンター研究員
井上　克人　関西大学教授
岡田　聡　早稲田大学助手
武藤　慎一　大東文化大学准教授
土井　健司　関西学院大学教授
佐藤　研　立教大学教授
鶴岡　賀雄　東京大学教授
中西　裕二　立教大学教授
川上　恒雄　PHP総合研究所主任研究員
伊藤　雅之　愛知学院大学准教授

JAPANESE ASSOCIATION FOR RELIGIOUS STUDIES

President SHIMAZONO Susumu

Directors

ASOYA masahiko
HOSHINO Eiki
KAWAMURA Kunimitsu
NAKAMURA Ikuo
SAKURAI Haruo
SEKI Kazutoshi
SUZUKI Iwayumi
TAJIMA Teruhisa
TSUKIMOTO Akio
YAMANAKA Hiroshi
FUJITA masakatsu
IKEGAMI Yoshimasa
KETA Masako
ODA Yoshiko
SATŌ Noriaki
SHIMADA Yoshihito
SUZUKI Masataka
TAKADA Shinryō
TSURUOKA Yoshio
HAYASHI makoto
INOUE Nobutaka
MITOMO Kenyo
ŌMURA Eishō
SAWAI Yoshitsugu
SUEKI Fumihiko
SWANSON, Paul L.
TSUCHIYA Hiroshi
UTSUNOMIYA Teruo

Editors

ASAMI Hiroshi
HOSAKA Shunji
KAWATŌ Masashi
MURAKAMI Kōkyō
SUGIMURA Yasuhiko
WATANABE Manabu
DOI Kenji
HOSODA Ayako
MARUI Hiroshi
SAKUMA Hidenori
SWANSON Paul L.
YAMAZAKI Makoto
FUJII Takeshi
KASHIO Naoki
MINOWA Kenryō
SHIRAKAWA Takuma
TSURUOKA Yoshio

宗教研究　三六四号

二〇一〇年六月三〇日　発行　会員頒布

発編行集　日本宗教学会
代表　島薗　進
印刷　三美印刷（株）

○本誌の刊行にあたっては、独立行政法人日本学術振興会平成二二年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受けています。

○購読希望者（準会員）は、会費七、〇〇〇円を添えてお申し込み下さい。

○本学会に入会希望の方（普通会員）は、会員二名以上の紹介をもってお申し込み下さい。

○学会関係の事務は左記でおこないます。

〒113-0033　東京都文京区本郷一―二九―七
ルマン本郷二〇五
日本宗教学会
電話　〇三―五六八四―五四七三
FAX　〇三―五六八四―五四七四
URL　http://www.soc.nii.ac.jp/jars/
振替　〇〇一二〇―五―四一七一七